

https://farid.ps/articles/shooting_incident_in_washington_dc/ja.html

ワシントンD.C.キャピタル・ユダヤ博物館での銃撃事件

2025年5月21日21:08 EDT、ワシントンD.C.のキャピタル・ユダヤ博物館（575 3rd Street NW）外で、綿密に計画された銃撃事件が発生し、平和構築に尽力していたイスラエル大使館職員のサラ・リン・ミルグリムとヤロン・リシュチンスキーニー2名が死亡した。この事件が偽旗作戦であるという決定的な証拠はないものの、イスラエル軍がヨルダン川西岸で公認の外交団に無謀に発砲した数時間後のタイミングは、1954年のラヴォン事件や1950～1951年のバグダッド爆破事件など、モサド、イルグン、レビなどのグループが物語を操作し戦略的利益を進めるために仕組んだ歴史的なイスラエル秘密工作と顕著な類似点がある。制限されたアクセス、矛盾する容疑者のプロフィール、平和擁護者の標的化、そしてイスラエル支持者による迅速な利用は、国際的非難からの注意そらし、穏健な声を黙らせ、反ユダヤ主義対策の名目で親パレスチナ活動を抑圧するためにイスラモフォビアを煽る試みを示唆している。

事件の背景と疑わしいタイミング

この銃撃は、「痛みを目的に変える」をテーマにしたアメリカユダヤ委員会（AJC）の若手外交官レセプションを標的とし、ガザとイスラエルの人道解決策を異宗教協力を通じて模索していた。博物館の公開時間（20:00閉館）後に開催され、イベントの場所は登録した参加者にのみ開示されたため、容疑者のエリヤス・ロドリゲスがどのようにアクセスしたかという重大な疑問が生じる。事件は、イスラエル国防軍（IDF）がジェニンで外交団に直接発砲し、近くの壁に弾丸が命中した広く非難された事件の数時間後に発生した。これは、警告射撃を空中または地面に撃つべきとする標準的な交戦規則からの逸脱である。この無謀な行為は、幸運にも死傷者を免れたが、フランス、イタリア、スペイン、トルコがイスラエル大使を召喚し、ガザでの報告された53,000人以上の死傷者の中で国際的批判を強めた。夜間に、Googleや国際メディアの「外交官射撃」検索結果がジェニンからD.C.の攻撃にシフトし、イスラエルの行動への焦点を効果的に薄めた。これは、ラヴォン事件のように国際的注意をそらすためにイスラエルが攻撃を仕組んだ歴史的な偽旗作戦を反映している。

容疑者のプロフィールと矛盾するマニフェスト

エリヤス・ロドリゲスは、31歳のシカゴ出身で、イリノイ大学で英語の学士号を取得し、口述歴史研究者としての経験を持つ、単独テロリストとしてはありそうもない人物である。彼のマニフェストは、「ハリンタールは雷や稻妻を意味する言葉」と始まるが、「ハリンタール」はダンジョンズ＆ドラゴンズのホームブルーにおける架空の大陸であり、雷や稻妻を意味しない。この参照は「ハリリンタール（雷鳴）」の綴りミスかもしれないが、これは東ティモール紛争（1999年）で占領を支持し独立に反対した親インドネシア民兵の名前であり、ロドリゲスの反帝国主義の姿勢やガザ解放の支持と直接矛盾する。研究者として、ロドリゲスはハリリンター

ルの歴史的役割を知っていた可能性が高く、マニフェストの参照が彼のイデオロギープロファイルと一致せず、捏造や外部操作の可能性を示唆している。ロドリゲスがFBIワシントン支部からわずか152.4メートルの博物館警備に降伏し、FBIが迅速に現場を封鎖したことは、公的逮捕を確実にするための計画性を示唆し、物語を増幅する意図があった可能性がある。逮捕時の「パレスチナを解放しろ、ガザのためにやった、私は非武装だ」という発言は、FBIの柔軟なプロトコルにより可能だったが、厳格なメトロポリタン警察の措置とは対照的で、メディアの影響を最大化する演出された行為を示唆している。2017年に社会主義解放党（PSL）との短期間の関わり（PSLは彼を否認）や、2024年にイスラエル大使館前での自爆抗議への賞賛は過激化を示唆するが、制限されたイベントへのアクセスやマニフェストの異常は外部支援の疑問を投げかける。

戦略的標的としての犠牲者

犠牲者のミルグリムとリシュチンスキは著名な平和擁護者だった。ミルグリムは2023年11月から公共外交部門で働き、Tech2Peaceを通じてイスラエル・パレスチナ対話を促進し、平和構築の友情に関する修士論文を進めていた。彼女の父親は「彼女は中東に住むすべての人を愛していた」と述べている。リシュチンスキは、ドイツ系イスラエル人のキリスト教徒で、IDFに勤務し、アブラハム合意を支持し、中東および北アフリカ問題に焦点を当て地域協力を提唱していた。人道的イベントでの彼らの死は、ロドリゲスの主張する反イスラエル動機と矛盾し、強硬政策に挑戦する可能性のあるイスラエル政権内の稳健な声を排除するための意図的標的化を示唆する。これは、バグダッド爆破事件など、より広範なアジェンダに奉仕するためにユダヤ人コミュニティを恐怖に陥れた歴史的シオニスト戦術と一致する。

未回答の疑問と物語の利用

この事件は、偽旗作戦の疑いを強める重大な異常を提起するが、直接的な証拠はない。ロドリゲスが、イスラエル大使館から5.6km離れた制限されたイベントの場所を、つながりのない民間人としてどのように知ったのか？博物館の閉館と登録者への限定開示は、彼が内部情報を持っていた可能性を示唆するが、活動家ネットワークや偵察も考えられる。ガザの福祉を促進する人道的イベントを標的にするのは、彼の主張する大義を損なうのはなぜか？降伏とFBI支部への近さは、視認性を高めるための演出された行為を示唆する。最も顕著なのは、トランプ大統領やAIPAC支持の政治家（ルビオなど）が、ロドリゲスの非イスラム背景やリシュチンスキのキリスト教徒アイデンティティにもかかわらず、射撃を「イスラム反ユダヤテロ」と迅速に枠組みしたことである。イスラエルの当局者、ネタニヤフを含む、はこれを2023年10月7日のハマス襲撃に結びつけ、敵を悪魔化し弾圧を正当化する過去の偽旗戦術を反映している。この物語はイスラモフォobiaを煽り、親パレスチナ活動の検閲を求める呼びかけを促進し、イスラエルの行動に対する米国の世論の急激な悪化に対抗する必要があるトランプのニーズと一致した。

歴史的先例との一致

D.C.の射撃がイスラエルの仕掛けと結びつく決定的な証拠はないが、確認された偽旗作戦との類似性は顕著である。ラヴォン事件ではイスラエルがエジプトの過激派を非難するために西洋の標的を爆破し、バグダッド爆破事件はユダヤ人のイスラエル移住を促進した。D.C.の攻撃のタイミングはジェニン事件からの注意そらし、平和擁護者の排除、反対意見の抑圧のための利用は、戦略的欺瞞のパターンを反映している。米国でのこのような作戦のリスクは大きいが、イスラエルの被害者物語の回復、国際的非難のそらし、反パレスチナ政策を推進する政治的同盟者の支援は、危機を乗り切るためのイスラエルの歴史的な秘密作戦の使用と一致する。

メディアのシフトとジェニン事件

ジェニン事件の重大性—IDFが外交官に直接発砲し、近くの壁に命中—は標準的な警告射撃プロトコルからの逸脱であり、注意そらしの動機を強調する。国際メディア（CNN、ニューヨーク・タイムズ、アルジャジーラなど）やGoogle検索結果がジェニンからD.C.の射撃に急速にシフトし、イスラエルの行動への焦点を薄めたが、欧州やトルコの外交的対応によりジェニンはニュースサイクルに留まった。この機會主義的な物語管理は、偽旗作戦を証明するものではないが、危機を利用して世論をシフトさせる歴史的パターンと一致する。

結論

キャピタル・ユダヤ博物館の射撃は、疑わしいタイミング、制限されたイベントアクセス、矛盾する容疑者プロフィール、政治的利用により、イスラエルの偽旗作戦の歴史と一致するが、仕組まれた証拠は欠如している。IDFがジェニンで外交官に無謀に発砲した数時間後の発生と、メディアがD.C.にシフトしたことは、国際的非難からの都合の良いそらしを示唆する。ロドリゲスのマニフェストは、「ハリンタール」の誤った参照や「ハリリンタール」との混同が彼の反帝国主義の姿勢や研究背景と矛盾し、捏造や操作の疑問を投げかける。イベント場所へのアクセスや平和擁護者の標的化はさらなる疑いを煽るが、彼の過激化背景と降伏は単独行為者の暴力と一致する。イスラモフォビアを煽り親パレスチナ活動を抑圧するための事件の利用は、歴史的戦術を反映し、モサドやシオニスト過激派の関与の可能性について緊急の調査を必要とする。決定的な証拠が現れるまで、この射撃はイデオロギー主導の悲劇的暴力行為であり、そのタイミング、マニフェストの異常、アクセス問題はさらなる調査を要求する。